

近江八幡市からのヨシ群落保全創造業務委託事業への取り組み

香川 雄一

環境政策・計画学科

1. ヨシ群落保全創造業務委託事業に至る経緯

平成 25 年度に滋賀県立大学環境科学部環境政策・計画学科は近江八幡市役所から「ヨシ群落保全創造業務」の委託事業を受け入れることになった。本学科では 2 年ほど前にも、野洲市役所から環境基本計画の中間見直し業務を請け負ったことがある。学科名にもあるような環境政策や環境計画への研究や教育の成果を、大学の地域貢献としても活かせるような形で本業務に携わることになった。

そもそも近江八幡市役所の環境課とは、学科教員が市の環境基本計画の策定業務に従事し、策定後も環境審議会委員として就任していたことによる交流があった。通常、会議の場では肅々と議事について話し合いが進められ、近江八幡市の環境問題をめぐって、検討事項や課題について議論される。そうした中で、市民委員や市役所職員の発言により、近江八幡市の環境保全の特徴と課題が伝わってきた。それは国の重要文化的景観にも指定されている水郷の風景をいかにして守っていくかということと、少子高齢化社会に進みつつある中で若者をどのように環境保全にかかわらせていくかということであった。ごみの出し方の徹底やポイ捨ての禁止などの不法投棄対策についてはどこの地域においても話題となるであろうが、水郷景観の維持保全、さらに具体的に考えると水陸移行帯におけるヨシをどのように保全していくか、とくにその課題に若者をいかにして参加させられることができるのかということに論点が絞り込まれた。

以前から近江八幡市役所の職員には、滋賀県立大学の学生による環境ボランティアへの参加に関心をもってもらえていた。大学全体を通じて、近江楽座や近江環人などの地域とかかわる活動がある中で、環境政策・計画学科では 1・2 回生に学外現場演習として環境問題の現場に行きイベントやボランティアに参加したり、当事者にヒアリングをしたりするという課題を設けていた。卒業研究や就職活動にもつながる体験となるので、実施当初は単位とは関係なく活動を促していたのであるが、平成 25 年度からは 1 回生は政策形成・施設演習の一部として、

2 回生は政策計画基礎演習Ⅱとして、こうした課題を授業化することになった。

このように近江八幡市からの業務委託の内容と本学科の授業カリキュラムが連動してきたかのように、ヨシ群落保全創造業務へと進んでいったのであった。事前の近江八幡市役所環境課職員と学科教員との打ち合わせや関係者との調整の後、平成 25 年 6 月 20 日に受託研究の受け入れが決定し、学科教員ならびに学科学生がヨシ群落保全創造業務に参加していくことになったのである。

2. ヨシ群落保全創造業務への取り組み

近江八幡市環境課の職員とも相談し、業務の進行については学科会議で検討しつつも、ヨシ刈りを実施していくためにヨシ群落保全創造業務の実行委員会を立ち上げることにした。というのも、近江八幡市から受託研究を受け入れるにあたって、学科が業務を請け負うことになるとはいえ、日常のさまざまな仕事の中で、組織が一体となって本業務に従事することは困難である。そこで学科教員と学科学生に加え、近江八幡市内の事業者や NPO などから実行委員のメンバーを決めていった。

まず、学科教員として、業務の企画立案段階から大学側の窓口となっていた香川が委員の人選にあたることになった。平成 25 年 6 月からの環境政策・計画学科の研究室仮配属に向けての相談で、ヨシに関する卒業研究を志望していた、3 回生の貴志萌が学科学生として委員に加わった。ただし貴志はすでに近江八幡市内で DIG' S という地域密着型サークルで活動していたので、肩書を近江八幡市内の NPO からの参加ということにした。学科学生としての肩書による委員としては、学期開始当初の授業でヨシにかかわる活動に参加してみたいという意思表示をしていた 1 回生の矢野友季子を選任した。

ここまでは大学側の立場がやや強い委員構成となっていたので、より地元に近い立場の委員を選定するため、ヨシ群落隣接地区に居住する 4 回生の辻将治に委員の就任を依頼し、承諾を得た。さらに近江八幡市内の事業者としては、平成 23 年度に滋賀県立大学大学院環境科学研究科を修了し、着地型の観

光開発による地域活性化の研究に取り組んでいた、キタイ設計株式会社の梶雅弘氏に委員への就任の了承を得た。最後に近江八幡市役所の職員を通じてヨシ業者の西川幸彦氏に委員会へ参加していただくことになった。こうしてヨシ群落保全創造業務の実行委員会が結成され、冬のヨシ刈りに向けて準備体制や参加者の募集方法を検討することになった。

3. 授業を利用したヨシ群落保全創造業務

実行委員会に学生は参加していたものの、たった3人であったため、教育的効果は弱かった。さらにヨシ刈りの動員においても学生の人数が足りない。そこで、実行委員会には備えることができなかった教育的機能を、授業担当教員の協力によって学科の授業で用意することになった。授業名は2回生を対象とした学科専門科目の「社会システム分析設計・演習」であり、平山奈央子教員の指導によりヨシ群落保全をテーマにした2チームが結成された。

この授業は、地域課題などをテーマにして、学生が改善策につながる社会システムの提案を目標としている。近江八幡市のヨシ群落については、学生にはほとんどなじみのないテーマであったようであるが、総勢14人のヨシチームが結成された。

なお、他にも学科1回生の必修科目である地域調査法演習等を通じてヨシ刈りへの参加を呼びかけ、新たに5名の1回生がヨシ刈りに参加することになった。もともと環境政策・計画学科では数年前から学外現場演習として地域のイベントに参加したり、地域課題に従事する専門家にヒアリング調査をしたりするなど、現場教育を重視していた。平成25年度からは政策計画基礎演習Ⅱとして、授業としても現場でのヒアリング結果を発表会で報告するという課題に取り組んでおり、ヨシ群落保全創造業務のヨシ刈りに関しても、教員や学生が積極的に参加できるような基盤が形成されていたと言える。

話をヨシチームに戻すと、後期の授業が始まってチームのメンバーが決まってすぐに、平成25年10月18日の授業で平山教員の引率の下、ヨシ事業者の西川さんへの事前ヒアリングを近江八幡市内で実施した。当日は市役所職員とともに貴志と香川も、西川さんへの挨拶のために訪問しており、ヨシ産業やヨシ群落についての実態と課題についての説明を受けていた。

ヨシ刈り自体は冬の作業であるため、ヨシチームは年末に向けて課題解決のためのシステム図の作成に取り組むことになった。実行委員会は11月末に

第1回の委員会を開催し、ヨシ刈りを実行するための準備と業務委託報告書の作成に向けた議論を始め、していくことにした。

4. ヨシ刈りボランティアとしての学生の参加

ヨシ刈りはヨシ群落保全創造業務において当初から期待されていた活動であった。元々ヨシ事業者によって生業のために毎年、実施されてきた作業も、事業者の高齢化や行政による補助金の削減などによって年々、継続が危ぶまれてきた。大学生がヨシ刈りに参加することによって、課題学習としての教育的要素とヨシ刈りの実践が結びつくという期待を込めて、平成26年2月21日、27日にヨシ刈りが実施されることになった。参加者は実行委員とヨシチームの一部、そして応募してきた1回生の学生であった。

4.1 ヨシ刈り作業（平成26年2月21日）

8時45分に県立大学バス停に集合し、2台の車に同乗して、ヨシ群落のある近江八幡市円山地区に向



写真1 ヨシ業者さんによるヨシ刈りの指導



写真2 みんなでヨシ刈り



写真3 ヨシ刈りの後は会食と意見交換



写真4 ヨシ刈りの最後に記念写真

かった。ヨシ業者の西川さんの作業小屋に到着すると、すでに西川さんと、市役所職員の2人はヨシ刈りの準備を始めていて、簡単な挨拶の後にヨシを刈るためにヨシ地に歩いていった。

ヨシ刈りのために学生一人一人に滑り止め付の軍手と少し柄が長めのヨシ刈り鎌を手渡した。こうした物品の準備も、ヨシ刈りに気軽に参加させるための委託業務の一環であった。ヨシ刈りの前に西川さんからヨシ刈りの方法についての指導を受けた(写真1)。刃物を使い、足場も悪いというやや危険な作業のため、学生一同は真剣に説明を聞いていた。

学生の参加者10名が少し広めの間隔を置いてヨシ刈りに従事した(写真2)。自分の身長以上の高さのあるヨシをつかんで腰をかがめて鎌で刈っていった。途中の休憩をはさんで約2時間、学生たちは黙々とヨシを刈り進めた。作業の感想として、かなりの重労働で疲れたという学生や刈り終わった後は握力がなくなったという学生もいれば、ヨシ地の生態に注目して、ヨシに交じって外来種のセイタカアワダチソウの方が多かった、ヨシを刈ってみて幹が中空であることがよく分かった、という印象を述

べた学生もいた。

ヨシ刈り後はそのままヨシ地で弁当を食べながら、これからのヨシ産業やヨシ群落をどうしていけばいいかといったことの見意見交換をした(写真3)。ほとんどの学生にとってみれば、1回きりのヨシ刈りというイベントへの参加であったかもしれないが、そこには地域社会における産業や文化の継承、さらには環境保全のにない手の養成といった課題が残されている。ヨシ業者さんの話を伺いながら、たとえヨシそのものでなかったとしても、学科の卒論のテーマにつながるような環境保全への問題意識の熟成に役立ててもらえればと思った。こうして1回目のヨシ刈りは無事に終了した(写真4)。

4.2 ヨシ整理作業 (平成26年2月27日)

翌週、2回目のヨシ刈りのために大学からと近江八幡駅とに分かれて集合し、再び円山地区に向かった。しかし残念なことに雨天のためヨシを刈る作業は中止となった。もうひとつ残念だったこととして、天候のせいもあったのかもしれないが、一部の学生が当日になって不参加となった。

西川さんの作業小屋に集合した4人の学生は簡単な挨拶の後に、西川さんからヨシの用途についての説明を聞いた(写真5)。ヨシ刈りができなかったとはいえ、ヨシ刈り後のヨシがどのように出荷されていくのかの過程を理解できる機会に恵まれたのである。実は2回目の作業には実行委員会のメンバー全員が参加することとなっていて、近江八幡市内の事業者の梶さんによる説明も加わり、ヨシ群落保全のための知識を得ることができた。一連の作業の流れとして説明を聞いた後に、まずはヨシの選別作業から始めた(写真6)。ヨシ地で刈り取って束ねられていたヨシを長さによって分類していく。さらに



写真5 ヨシの用途についての説明



写真6 ヨシの選別作業



写真7 出荷先によるヨシの違いについての説明



写真8 雨天時のヨシ整理作業後に記念写真

同じ長さのヨシでも太さや節の違いによって出荷先別に分けていく（写真7）。同じヨシ製品であっても北陸と東海では出荷するヨシの種類が違うという話は驚きであった。

作業小屋には他にも近江八幡市内から集まったシルバー人材の方が作業をしていて、ヨシを収穫する

ための道具や何束ものヨシが並んでおり、実行委員会のメンバーとしてもヨシ産業の実態に触れる機会となった。早めに作業を終了し、弁当を食べながらの意見発表を兼ねた実行委員会を開催した。実行委員ではない学生もヨシ群落保全に向けた提案を発表した。こうして2回目の作業は当初のヨシ刈りを変更して、ヨシの整理作業として終了した（写真8）。

5. ヨシ群落保全への期待と課題

近江八幡市内のヨシ群落保全が課題となっているという話を聞いた時、琵琶湖沿岸域における生態環境の保全や水郷景観という国の重要文化的景観の保全という研究課題としてのイメージはあったのだが、大学生への教育として、さらには環境政策・計画学科の受託業務として、取り組める課題となるという意識はしていなかった。

しかしながら近江八幡市の環境関係の会議に参加し、市役所職員と若者の環境行動について議論を進めていくにつれ、環境科学部や環境政策・計画学科としての教育実践が役に立つのではないかという展望が見えてきた。環境フィールドワークや学外現場演習といった地域の実態から学ぶという姿勢は、本業務の企画立案においても参考にしている。

学生自らが地域の環境活動に参加し、地域の人々と接することで、成績だけでは反映されないような力が身についていく。こうした経験は卒業研究や就職活動、そして社会人になってからも活かされていくことを期待できる。

本業務を遂行するにあたって、学生によるヨシ刈りの実施はいわばメインイベントであった。ただし、ヨシ刈りにたどり着くまでには業務の受託以降、毎月の学科会議で計画の進行状況を報告し、学科教員からの指示を仰いできた。そこでは環境政策・計画学科としての研究者や教育者としての専門性が十分に発揮されていたと思われる。

その成果として本業務は平成25年度末にヨシ群落保全創造業務としての報告書を完成させた。報告書の執筆者には学科教員や学科学生、そして実行委員会の委員が名を連ねている。近江八幡市からの委託業務をきっかけとして、今後も滋賀県立大学の研究教育活動により、ヨシ群落保全のための成果が継続的に残されていくことを願っている。